

受難節第5主日礼拝説教「あなたの願いは？」

日本基督教団石神井教会 2018年3月18日

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 5章1～11節

¹このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、²このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。³そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、⁴忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。⁵希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。⁶実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。⁷正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。⁸しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。⁹それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。¹⁰敵であったときさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。¹¹それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

【福音書日課】マルコによる福音書 10章32～45節

³²一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。³³「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。³⁴異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」

³⁵ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」³⁶イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、³⁷二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」³⁸イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」³⁹彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。⁴⁰しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」⁴¹ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。⁴²そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。⁴³しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、⁴⁴いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。⁴⁵人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

先頭に立って進み行かれ…

毎週日曜日にこの場所でご一緒に礼拝にあずかられている皆さんの中でつい最近まで最年長でいらした教会員のA兄が先週、地上のご生涯を終えられました。数週間前まで、車椅子にお乗りになられながらも、ほぼ休みなく礼拝においてになられていたのです。お元気なときには会衆席の一番前で、車椅子のままのときには一番後ろで、礼拝にあずかられていらしたお姿を、皆さんも思い起こして下さるのではないのでしょうか。二十歳で洗礼をお受けになられ、最初は教会の交わりの最後尾を歩み始めて七十七年、最後はほとんど先頭を先立ち歩まれて、後に続く者に背中を見せて下さる存在となっていっしょだったのです。

しかしながら、そのようなキリスト者といえども、主イエスの後に従って行く一行の大集団の中では、ずっと後ろのほうに位置していらしたと言うべきかもしれません。何せ主イエスの後に従う一行の集団は、二千年間、世界中に広がりを見せながら途切れることなく後に続いて歩みを重ねてきた大集団なのです。

「わたしについて来なさい」（マルコ 1:17）。あの弟子たちに向けられた主イエスの呼びかけは、主がご自身の受難を予告される中で、あらためて、弟子たちばかりでなく群衆とも呼ばれる多くの人々に向けて、告げられました。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（マルコ 8:34）。主イエスは、その呼びかけに応えてご自身の後に従ってくる者たちのために、まさに**先頭に立って進んで行かれて**おいでです。この一行があまりに大きな集団になってしまっていて、ほとんど最後尾にいるわたしたちには、先頭を行かれる主イエスのお姿がはっきり分らないと思えることもあるかもしれません。けれども、わたしたちが背中を見ている先輩信仰者の先の先、その先頭には、間違いなくあの主イエスが立って進んで行かれているのです。

その主イエスのお姿を見紛うことがないようにと、最初の時代の教会の人々が福音書をはじめとする新約聖書をまとめてくれました。それは、ほとんど神ご自身がなして下さったことと言いきでありましょう。聖書の中に、わたしたちは、生き生きとした主イエスのお姿を見ることができのです。けれども、代々の信仰者たちは、その聖書を学び、体系化し、身に着けることで、主イエスの後に従う者となったわけではありません。ただ、主イエスのお受けになられた洗礼〔バプテスマ〕のしるしを受けさせていただき、また主イエスの飲まれた杯のしるしを聖餐の杯として飲ませていただくことで、後に従う者となったのです。

先々週の教会役員会で、若い洗礼志願者と堅信礼志願者の試問会をしました。試問会といっても、聖書や教理の知識を問うたわけではありません。ご本人の洗礼・堅信に向けた思いを聞き、教会を代表して役員各人が教会の群れに受け入れるための励ましを語りました。洗礼を受けることを願い、すでに受けた洗礼のしるしを確かめる堅信礼を受けることを願い、聖餐にあずかるようになることを願う。そのように願う思いを確かめられれば、十分なのです。

主イエスの受けられた洗礼を受け、主イエスの飲まれた杯を飲む。わたしたちは皆、ただそのことによって、主イエス一行の最後尾に加えられているのです。

「何をしてほしいのか」

主イエスは、後に従う者たちに洗礼と杯のしるしをお与えくださいました。弟子のヤコブとヨハネに「**確かに、あなたがたはわたしの飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる**」と告げてくださったときから、主イエスの洗礼と聖餐の杯は、主イエスの後に従う弟子のしるしとなったのです。

洗礼を、わたしたち人間が救われるのに不可欠なしるしだと考える人たちがいます。洗礼を受けないままで死んだ人は天国に行けない、というのです。逆に言えば、洗礼を受けさえすれば天国行きは保証される、というのです。そのような考えが正しいにしても、間違っているにしても、今日の福音書が、それとは違う次元で、洗礼を受けることをわたしたちに教えているのは確かです。洗礼は、主イエスが行かれた同じ道を後から従い行く者の一人として加えられるしるしなのです。

しかしながら、わたしたちは、主イエスの先立ち進まれる、その行く先を、必ずしもよくわかっているわけではないかもしれません。

主イエスは、その行き先を、弟子たちには端的にエルサレムだと指し示されていきました。そこは、仮に当時のユダヤ人世界で成功を収めようとするならば、当然目指すべきところであったでしょう。けれども、主イエスは、そこで成功を目指すとはお語りになられなかったのです。「**今、わたしたちはエルサレムに上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する**」。これが、わたしたちの行き着く先だと、主イエスは弟子たちにお告げになられたのです。

そのように弟子たちにおっしゃられたのは、初めてではありませんでした。すでに三度目でした。一度目は、そのことを聞いた弟子のペトロがいさめたため、主イエスは「**サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人のことを思っている**」(マルコ 8:33)と叱られたのです。二度目のときには、弟子たちは、主イエスの言葉の意味を理解しかねて、何も応えることができませんでした(同 9:30~32)。ただ、主イエスに尋ねるかわりに、自分たちの間で**だれがいちばん偉いかと議論し合**(同 9:34)いました。きっと、ペトロが退けられた後の一番弟子の地位を議論していたのでしょう。そういうことがすでにあって、三度目に、主イエスがエルサレムでの受難をお告げになられたのです。

このときヤコブとヨハネが願ったことを、世俗的な権力欲からの願いだと評する人がいます。けれども、二人とも、すでに、主イエスがエルサレムで捕らえられて殺されることを繰り返し聞かされていたのです。その主イエスがエルサレムで権力の座に着くとは考えていなかったでしょう。むしろ、二人の視点は、主イエスが殺された後、三日目に復活されると告げられたところに向けられていたはずで、その、復活されて神の栄光に浴されるところに至られるときに、どうか、自分たちもそこに至れるように、願わくば主に一番近いところにまで至ることができるようにと、二人は願ったのではないのでしょうか。

「あなたがたの間ではそうではない」

主イエスの後に従い、主イエスの行かれた道を追って行こうと願う者であれば、わたしたちも、この二人のように願うのではないのでしょうか。主イエスの弟子として、もちろん、主イエスほどではないとしても苦難をもこの身に引き受けて、しかし、その苦難の先には、主のご復活の栄光にも浴させていただきたい。洗礼を受けた者として、教会に連なる者として、わたしたちが忠実な主イエスの弟子であることを真剣に願えば、おのずとそのような願いの言葉が出てくるのではないのでしょうか。

そうであればこそ、わたしたちは、毎年、主のご復活を祝う前に六週間余りの受難節の祈りの季節を設けているのでしょうか。深い悔い改めの祈りのうちにあらためて自分を捨て、克己と新たな献身の思いのうちにこの世で自分が引き受けるべきこと、殊に困難や苦しみを「自分の十字架」として背負いなおして、主のお受けになられた御苦しみの一部にでもあずかることを通して、復活の命に至る道を歩ませていただこう。そのような思いで、受難節を過ごしているのではないのでしょうか。

そのようなわたしたちに、弟子たちに、主イエスはおっしゃられるのです、「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない」と。どうしたら主と同じような苦しみを引き受けて、より主イエスに近いところにまで至れるかと、まるで「ミニ殉教者」として成功するようなことを願っているのならば、あなたは、大切なことが分かっていない。そんなことはわたしの決めることではない、わたしの関心ごとではない。そう、主イエスは言われるのです。

わたしたちは、主イエスの後に従うようにと招き出されてきた者です。主イエスが行かれる先を見越して意見を述べようとしたペトロは、叱責されました。主イエスがいずれたどり着かれるであろうところに目を向けて、そこに至る願いを語ったヤコブとペトロも、「分かっていない」と退けられました。わたしたちは、後に従う者であると言いながら、目の前の主イエスのお姿よりも、主イエスが行かれる先の先に、思いを先走らせてしまいがちなのです。主は、そのような者に、「このわたしを見なさい」とおっしゃられているのではないのでしょうか。

「あなたがたは、この世の支配者や偉い人々の振る舞いを知っている。しかし、あなたがたの間にいるわたしは、そうではない。わたしは、あなたがたの間で、**皆に仕える者になり、すべての人の僕になろうとしているのだ。**」

人々の手に引き渡され、苦しみを受け、殺され、三日の後に復活すると繰り返しお告げになられた主イエスが、後に従う者たちにお示しになられたのは、そのことだったのではないのでしょうか。偉い人々のように人に認めてもらいたければ、目立たないところで人に仕えるのは無駄です。支配者たちのように報いを望むのであれば、僕の生き方は損ばかりです。そうであればこそ、人の手に引き渡されることも、苦しみも、死も、そして復活も、それは、皆に仕える者として生きる道で与えられるしるしなのです。すべての人の僕として生きる者に添えられるしるしなのです。それが、わたしたちに先立ち行かれる主イエスのお姿なのです。